
カレル・ウォルフレンと文化相対主義

石 積 勝

プロローグ

それぞれの文化はその文化自体の関連の中で理解されたり評価されたりすべきであるという考え方が生まれた。ある文化で道徳的なことが他の文化では不道徳だったり、道徳的に中立であったりするかも知れないのである。——中略——文化の諸要素はその文化全体との関連の中で理解されたり、また評価されたりしなければならないという考え方——これが文化相対主義というドクトリンだが——は次のような結論に導く。

すなわち、様々な文化そのものは他の文化と比較して高いとか低いとか、優れているとか劣っているとか、その様に値踏みされたり評価されたりされうるものではない。もし父方からの子孫が母方からの子孫より優れているとか、劣っているとかいうことが正統でなかったら、あるいはまた、一夫一婦制が複婚制より優れているとか劣っているとかいうことが無意味であるというなら、ある文化が他のある文化より優れているとか劣っているとかいうことも不合理かつ無意味なことである。

多くの人類学者はまさしくそのように考える。つまり彼

らは文化における優劣の判断は主観的であり、したがって非科学的なものであると考えるのである。多くの価値は評価（比較）の対象になりえないし、基準というものはおうおうにして主観的なものである。現代西洋文明に生きる人々はオーストラリアのアボリジニと比べてより幸福なであろうか？ 大人であるより子供の方がよいのではないか？ 死より生の方が本当によいのだろうか？ こうしたことがらは科学の対象にはなりえないのである。

しかし、古代マヤ文明はタスマニア人の自然のままの単純な文化より優れてはいないとか、高度に発達してはいなかったと主張したり、あるいはまた1966年に於ける英国の文化が1066年のそれよりも高度でないなどというならば、それは科学や常識というものに真っ向から反抗しようという愚挙であるといわなければならない。

（『エンサイクルペヂア・ブリタニカ』第14版 文化相対主義の項目、筆者による訳出）

1 ウォルフレンによる話題の本——『日本/権力構造の謎』

滞日23年のオランダ人ジャーナリスト、カレル・ウォルフレンによる大著『日本/権力構造の謎』の訳本が出版された。現在14カ国語で翻訳が進行中であるというこの本は日本でも待望久しく、各方面で話題を呼んでいる。本書英文原本が出版されてから既に二年、欧米における対日政策担当者のバイブルになりつつあるというこの書については、わが国でも訳本出版以前から、「中央公論」誌上でのそれを始め、さまざまに議論された。評論の多くはウォルフレンをいわゆる「修正主義4人組」¹⁾の中心にすえ、反日的ジャーナリストの代表格としているようである。

そうしたウォルフレン論には明らかに彼の著書の全体像をまともに読み切ることなしに部分抽出で感情論を進めているものも多い。確かに随所に見ら

れる氏独特の断定的な表現はすくなく反発を招こうが、筆者の見るところこの書は凡百の日本論・日本人論をはるかに越えており『菊と刀』以来の本格的日本論の地位を与えてしかるべきではなかろうか。『菊と刀』のように熱狂的に日本の知識人に迎え入れられることはなかったが、重要な一冊であることには変わらない。

ウォルフレンは日本という総体にアプローチするにあたって、権力を、権力の行使の姿を問題とする。滞日20数年のジャーナリストらしく様々な事実の提示を行いつつ、政治的正統性や政治的多元主義の問題とからめ徹底的に日本を日本社会を俎上にのせる。彼が日本論の視角として権力論、政治論を選んだひとつの理由は、今までの日本論が社会学的、経済的、さらには文化的アプローチに偏っていて、それでは不十分であると感じていたことにある。そうしたアプローチでは解明されない重要なテーマがあると考えるのである。経済でも文化でもなく、政治そのもの、権力論から正面切ったアプローチをとったこと、それは新鮮である。

ウォルフレンは今では日本内外に広く使われるようになった「ジャパンプロブレム」という言葉を最初に使用した人物として知られる。彼は雑誌「フォーリン・アフェアーズ」に於いて「ジャパンプロブレム²⁾」というタイトルのもとに日本問題を論じたのであるが、本稿でまずとりあげた彼の名著『日本/権力構造の謎』の第一章も同様のタイトルとなっており、この本は「ジャパンプロブレム」をいわば詳述する形になっている。

ウォルフレンによれば、日本問題の根本は西洋諸国が日本を誤解してきたことにあるという。基本的に自分たちと同質な国家であると誤解してきた事に多くの問題の発生原因があるという。二つの誤解がある。その第一は日本に責任ある中央政府があるという誤解である。したがって外交交渉などに於いても他の国々にあたるような発想・様式で日本にあたることは危険であるとする。つまり日本政府は国家の意志を必ずしも代表しないというわけである。確かに最近の日本外交、例えば対北朝鮮を巡る金丸外交、湾岸戦争を巡

る政府の対応をみると、ウォルフレンの指摘は説得力を持つ。ウォルフレンは日本に国家としての主体性があるのかと問うているわけである。

第二の誤解はさらに根源的な問題に係わっている。ウォルフレンは日本を西洋諸国とは全く違ったゲームをやっている国としてみる。「日本の個人主義を組織的に抑圧する力は、過酷な中央政府があつて、そこから発しているわけではない。日本は欧米の自由主義国家とは大いに異なるが、それと同じくらい、東欧やアジアの集産主義的共産国家とも違うのである³⁾」つまり前述した第一の誤解ないしはフィクションが政治のプロセス・主体性に係わることであるとすれば、この第二のポイントは政治・社会的価値の非共有という問題に係わっていることがらである。まさしくこの第二の点、つまり西洋社会にはどうしても受け入れ難い日本の構造、それを支えるもの、それこそ彼が様々な事実列挙と共に本書の中で明らかにしようと試みていることである。

ウ氏の行う日本社会の解明作業に対しては特に日本の論者から様々な批判が寄せられている。そこで本稿ではそうした批判のいくつかを検討し、同時にウ氏の議論を肯定する論説も取り上げウ氏が我々に突きつけている問題を少しでも明らかにしたい。そうした作業の前提として、まずはウ氏の著書『日本/権力構造の謎』を筆者なりに要約することから始めたいと思う。

2 『日本/権力構造の謎』で描かれる日本

本書に一貫して通底するキーワードが二つある。その一つは〈ザ・システム〉であり、もうひとつは〈アドミニストレーター〉である。第一のキーワード、〈ザ・システム〉は日本国家についてのウ氏の形容である。彼は述べる。「みんながみんな、権力行使過程に参加しているという政治体（＝統治体、つまり政治的に組織された国民の総体）を一応、国家と呼ぶことは出来る。しかし、まぎらわしいこの定義では、国家の概念が余りにも漠然としたものになってしまう。しかもこの場合でも、なお、そこには政治的中心の存

在を前提とする、責任の所在がなければならない。では、国家の定義を適用出来ないが、しかし一国の政治的営みをすべて包含するものを、なんと呼べばよいのであろう。筆者は、“システム”ということばを当てれば混乱が一番少なくてすむと思う⁴⁾」そして「それは逃れようのない支配構造」「理屈というものを一切受け付けない代物」「民主的な政治の調整力の範囲を越える権力をほのめかすもの」であり、つまり「国家でもなく、社会でもない、それにもかかわらず、日本人の生き方を、また、だれがだれに服従するかを決定する機構」を“システム”と名づけようというのである。

さてそのような“システム”を管理運営する役割が“アドミニストレーター”とよぶべき一群の人々によって担われているという。「〈システム〉の上部では、官僚、民間企業の最高幹部に転じた元官僚、官僚出身の政治家、官僚出身あるいは官僚化した財界指導者が渾然一体となり、親密につき合いながら、経済全体を監督し、社会を管理している。“官僚”ということばを“管理者”(アドミニストレーター)に置きかえてみれば伝統的な産業化社会における官僚、政治家、企業家、などの峻別が日本ではほとんど存在しないことが分かる。日本に特有なこうした人々をこの本では管理者(アドミニストレーター)⁵⁾と呼ぶ」。

そうしたアドミニストレーターはシステム維持のために「抱き込みの包囲網」(『日本/権力構造の謎』第三章)を張り巡らす。自覚した市民運動は無力化され、農協は農村でのシステム機能を強化・維持する。労働者もまたあの欧米企業家の羨ましがる労使協調の中で抱き込まれる。つまり日本には本当の意味での政治的多元主義が存在していないというわけである。このシステムは校則・規則の大量生産工場と化した教育制度、自主検閲のまかり通る新聞・マスコミによって批判の眼からのがれ、さらにはまた様々なレベルでのイデオロギーがそれらを補完する。構造的補完要素に支えられたアドミニストレーターは非公式な人的ネットワークを通して〈ザ・システム〉の維持を進めるのである。サラリーマンは忠誠心を植え付けられ、家族主義的思想に

よって家や会社が政治化され、利益代表を持たない中産階級は服従と秩序の世界に漂うという。

アドミニストレーターの〈ザ・システム〉維持に最も好都合なのは、日本人が理論と現実を一致させようという強い衝動に欠けていることであり、いや日本にはそもそも理念なるものが無いことであり、これが政治的・社会的緊張を少なくすることである。それは本音と建前の使い分けを日常化し、論理性の蔑視につながるのであるが、つまるところ知的真空列島を作り出す。つまり「政治的な方策のせいで日本人は何世紀にもわたり、無形ながら非常に重要な文化的財産、すなわち自由な論議の場を奪われてきた。日本に欠けていたのは、これらの人々の思索をつなぎ合わせて、思考の枠組みとするという壮大な知的伝統⁶⁾だった」というのだ。日本の政治文化では権力関係が超越概念（理想・真理・信条・論理）の制約を受けず、実はどの様にそれを覆い隠そうとも「力は正義なり」が貫徹されており、言うまでもなくアドミニストレーターにその力を握られているというのである。

それを覆い隠すための間接的手段として同質性の神話が流布され、日本主義は殆ど宗教色を帯びる。多くの日本論も実は意識してか否かに係わらず、この日本主義に彩られ、日本社会の権力関係すなわち日本の現実⁶⁾に誰も踏み込もうとしない。このアドミニストレーターによる〈ザ・システム〉の維持は第二次大戦によっても途絶えることなく、実は戦前戦後を通じ、明治以来一貫して強化・維持され、戦争によって促進されてきたものだという。官僚、特に経済官僚のサバイバルによってそれは維持された。30年代と現在の唯一の違いは「30年代には国防国家の概念や、大政翼参会を生んだ新体制運動に具体的なビジョンが明確に説明され、当時のバラバラだった支配エリート諸集団⁷⁾を統合する意図があった点である」という。

このようにアドミニストレーターによってきわめて巧妙にコントロールされているのが日本社会なのだが、この日本社会の聖なる秩序に対してはふたつの脅威が存在する。ひとつは聖なる秩序が厳然と存在するにもかかわらず、

それを突き破ろうとする力であり、それに動かされる形で噴出する国内における思想・行動の混乱である。これは常に潜在的脅威ではあるが、今のところ〈システム〉そのものを脅かすほどのものとはなっていない。第二の脅威は外部からの脅威である。これは第一のそれよりもはるかに厄介なものである。その基本的な性格上、〈システム〉にとって絶えざる不安定の種となるものである。つまり外部の世界（外国）には日本の伝統的社会統制技術が通用しないからである。

敗戦でも生きながらえてきた〈システム〉——日本という不死鳥は、その本性からしてこうした外部からの挑戦に対してうまく対応できないであろうとウ氏は予言する。なぜならばこの不死鳥国家には進路変更の政治的決断をするだけの力ある個人や統一した集団が存在しないからであり、不死鳥は衝突に向かう道からのがれられないであろうという。その様にウ氏は予言し、もしこの〈システム〉の大変革があるとすれば、つまり〈システム〉が真の近代立憲国家になり、日本の国民が市民にかわるという素晴らしいシナリオを達成するには、正真正銘の革命にも等しい権力の再編成が必要であるとの結論でこの書を締めくくる。

3 ウォルフレンへの批判

日本は立憲国家ではないと断定され、責任ある中央政府も存在せず、ましてや自由主義経済国でも本当のところはないといわれ、日本の評者たちが黙っているはずがない。しかもウ氏は追い打ちをかけるように「中央公論」誌上で日本知識人批判を展開し、多くの知識人もまたこのシステム維持の一端を平然と担っていると断じた。反論異論が噴出したのは当然である。『日本/権力構造の謎』の訳書が出版される前に発表された「中央公論」論文「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追随する⁸⁾のか」は特に刺激的な文章であった。この文章中に登場し批判された舛添要一氏、村上泰虎氏をはじめ、クラーク

氏、矢野氏らが次々に反論を述べ対談する。この論文の次の箇所が特に問題であった。「反自由主義と反西洋主義はとどのつまりは反主知主義である」⁹⁾。

評者たちはここに大胆不敵な西洋中心主義を当然な事ながら見てとる。ウ氏論文全体の中でここだけが抽出されることは全く不当であると筆者は考えるが、いずれにせよある意味ではウ氏の問題提起の核心を表している部分ではある。ウ氏が反論するように「{反自由主義と反西洋主義は、とどのつまりは反主知主義である}ことは{知識人は必然的に、自由主義者であり、西洋主義者でなければならない}という主張(定理2)と論理的に等値である」¹⁰⁾

(村上論文)とは筆者も考えないが、西洋を中心に展開した知的営為に対する強い確信の現れであることはまちがいない。

じっさい『日本/権力構造の謎』の中でも西洋的二元論の主張は色濃く展開され、それとの対比で、例えば禅的なものは一刀両断に切捨てられる¹¹⁾。また日本には責任ある中央政府が存在しないというが、日本は自由主義経済ではないと断定するが、さらにはまたそれを支える市民ないし市民意識が日本には育っていないというが、そうした政府、自由主義、市民という西洋の概念を当てはめて非西洋社会を分析すること、それ自身限界があることは当然ではないかと反論するのはもちろん容易である。

さらにもっと突き詰めていえば、ウ氏が嘆き悲しむ、日本における超越的理念の欠如などは余計なお世話であるともいえる。超越的理念が力を与えられ、一人歩きをし、普遍性の名のもとに様々な蛮行を世界中で繰り返してきたのではないかと反論できる。評者たちも、ウ氏の主張・分析に西洋中心主義を見てとり日本の文化特性への無理解を読みとる。つまりウ氏に西洋の新保守主義を感じ、反文化相対主義の現れを見てとるのである。例えば1990年吉野作造賞受賞の『日本文化論の変容』(青木保)はウ氏の著書に対してその日本を見る態度の真剣さには一定の評価を与えつつ、究極的には欧米主義からの一方的な日本批判であると断ずる。そこに反文化相対主義の台頭を見てとるのである。青木氏はそうした反文化相対主義をルース・ベネディクトな

どの文化相対主義に対比し、今こそベネディクトの態度に学ばねばならないとする。¹²⁾のであるが、例えば彼女の著書に内包するイデオロギー性をみごとに描いたダグラス・ラミス氏によるベネディクト批判をどの様に受け止めているのか、この点は不明である。しかしベネディクトがここでの話題ではない。問題は反文化相対主義である。青木氏以外の論者たちのウォルフレン観も西洋中心主義、自文化中心主義、そして反相対主義で彩られている。

前出村上氏はウ氏が主張する普遍理論はいかにも素朴であると断ずる。そしてウ氏は文化相対主義に反対であって、それを生み出したアメリカ的リベラリズム（例えばベネディクト）に反対であって、さらにいえば、ウ氏の発想の根底に流れるハードな西洋主義、すなわち、知とは普遍的で一元的なものである、という一元的進歩史観は既に欧米においてさえ破産しているのではないかと指摘する。¹³⁾一方『日本——ユニークさの起源』で知られるグレゴリー・クラーク氏は〈ザ・システム〉が定義されておらず、日本に対する一方的かつ感情的な批判にこの書は貫かれているという。欧米インテリの日本に対する勉強不足と偏見があいまって、このようなウ氏の論が欧米でもてはやされ、それによるインパクトが恐いという。論理とか原理と叫ぶがそうしたもので成り立つヨーロッパ社会が崩壊しつつあることをウ氏はどのように考えているのかと問う。¹⁴⁾

クラーク氏と対談した伊藤氏はクラーク氏同様大陸ヨーロッパの偏見が残るといいながらも、しかしその主張には自己矛盾はあるが共感も感ずる部分があるとやや中立的な発言を行う。だが次のくだりはいけなかった。「幸いクラークさんがこれだけ関心を持って反論してくださるのだから、ひとつ外国人の方々に反論はおまかせして、日本人はむしろ、こういう指摘の中から何をくみ取るべきかを考えなければならないと思うのです」¹⁵⁾ こういう態度こそがウ氏による「日本には知識人がいない」という発言につながるわけである。つまりこれは「興味深い〈労働の分業〉かも知れないが、なぜ日本人は拙著への反論をしながら同時に日本の役割を考えることが出来ないのだろうか。

このふたつは無関係だとでもいうのだろうか。なぜ日本とその役割について、日本人と外国人の間でまじめな議論が行われ¹⁶⁾ないのだろうか」ということになる。

矢野暢氏とウォルフレン氏の「中央公論」90年5月号での対談は平行線を辿るものではあったが興味深いものであった。ウォルフレン氏が自由や人間や人類という言葉キーワードとして〈当為〉を語るのに対して、矢野氏はあくまでも個別性、固有文化の〈存在〉を語ろうとする。つまりここでも普遍主義と相対主義のせめぎあいが見てとれるのである。しかし矢野氏はウ氏の西洋中心主義を一方で批判しつつ、日本が西洋とは違った形で作り上げつつある新しい文明を日本の知識人が十分に組織化体系化して語る努力をしていないと認める。つまり日本は独自の文明のシナリオのレールで走りだしているのだが、それをまだパラダイムとして語るどころまでいっていないのであり、それがために修正主義者の日本批判を生んでいるというのである。

ところで私はウ氏の著作を読みながら、またそれに対する反論の数々に眼を通しながら、一昨年訳文が出版された『公式日本人論』なる日本論を想起していた。詳しくこの本について述べる余裕はここではないが、日本人には、あの例の「見えざる手」の信仰がないがために、自分自身の中に自律調整器管を機能させ、それによって日本人同士の〈あうん〉の呼吸を別にすれば日本人同士でもコミュニケーション不能な状態に陥っているというものであった。ましてや外国人とのコミュニケーションはほとんど絶望的であるという。著者が誰であるかも明かされず、米国政府の機密文書であるとされるこの『菊と刀』現代版とされるこの書は奇妙な書ではあった。私はしかし高圧的言辞に彩られたこの書はもっと注目されてしかるべき書であると思っている。私はこの書に対する「朝日ジャーナル」誌上での富岡氏の書評が的はずれであることを私自身の記憶のために文章にしておいたことがある。¹⁷⁾富岡氏はこの書を「日米文化摩擦にはなんら貢献しない書である」とし、「危険な反文化相対主義の台頭」として論じられている。私はといえはこの書に貫かれている強

圧的言辞に感情的に反発せず、その本音の発言にこそ耳を傾ける必要があると強く感じていたものである。そしてそこには重大な私たちが看過している文化摩擦の本質、日本社会の問題がえぐり出されていると直感していた。

私はウ氏から何らかの形でこの『公式日本人論』にかかわっていたとしても不思議でないと思っている。両書ともに〈反文化相対主義〉といわれようが、奇書とされようが、我々日本人からの一見の得た、しかし究極的には評論家的、傍観者の態度につながる批判など気にせずに、強引に我々を彼らの土俵に引き入れようとする。だが我々は残念ながらその誘いに殆どついていない。

4 ウォルフレン氏に賛意を示す論文

こうしたウォルフレン批判あるいは反文化相対主義批判の中で、清水邦男氏の「ウォルフレンに感謝しよう」（『中央公論』90年4月号）は数少ないウ氏擁護の論文のひとつであった。もっとも表題が示すように清水氏はウォルフレンに日本人として感謝しようといっているのであって、あちら側に立ってのウ氏擁護論ではない。

清水氏はウ氏を悪魔の弁護人に見たてる。悪魔の弁護人とは、わざと反対の立場にたって、大勢を占める議論に異議を唱え、結果的に議論を深化させることを意図している人物である。そしてその様な役割を自らかつてでくれたウォルフレン氏たちに感謝しなければならないと清水氏は論ずる。「日本と欧米の相違、異質性という根本的な問題を取り上げてきた《悪魔の弁護人》たちの大審問は、欧米的な政治経済理念と日本の異質性がどの様にかみ合うのかを徹底的に考えようとする知的挑戦であり、逆説的に日本の政治大国としての資格を試す審問とも言えよう」「この問いかけに答えるのは容易ではないが——中略——この《聖なる知的審問の儀式》に、感情的な拒否反応¹⁸⁾や反発で対応することは、日本そのものを矮小化することにほかならない」。

さて清水氏によればウ氏ら修正主義者たちが一貫して主張することは次の一点に尽きるといふ。それは日本という国家には「超越理念がなく」「日本人の意識には超越理念という観念がきわめて薄い¹⁹⁾か、あるいはないのではないか」「あっても無視されている」ということである。この超越理念こそ、欧米の人たちにとってはそれなしでは近代国家そのものが成立しないし、欧米の秩序そのものが混乱してしまうと思っているものである。

彼らからすれば〈それ〉がない国家・社会など考えられないので「ほら {それ} だよ」としかいいようのないものであるにも係わらず、ウ氏はこのそれを巡る知的課題に真正面から取り組んでいると清水氏は評価する。清水氏はそうしたウ氏の挑戦を高く評価し、氏の次のような告白を注意深く見落とさない。「超越的真理の可能性を容認しない政治文化のエッセンスを把握しようとすることは、西欧の人間にとって異常な知的努力を必要とする仕事だ。こうした仕事は、従来の日本研究の中でも殆ど行われてこなかった。西欧の知的道義的伝統は、いくつかの信念の普遍的価値という前提に余りにも深く根を張っている²⁰⁾ので、そうした前提の無い文化というものの可能性を想像することすら殆ど不可能である」。

21歳で外国にわたり、その後もフランスを中心に何回となく日本との間を往復してきた清水氏にとっては、まさに〈それ〉こそが日本と西洋の間に横たわるものである。氏はなぜ日本人が原理原則の問題に無関心なのか、なぜ欧米は〈それ〉にそれほどこだわるのかという分析が必要であると考え、そうでない限り「日本人の盲点」の克服は不可能であると説く。さらに超越的理念などといえ一見難しそうであるが、実は簡単なことであって、それをフランスにおける自動車学校での教習の例によってのべる。「超越的理念とは信号のようなもので、日本人以外人間がいつどこからきても、日本という国では、どういう基準・物の考え方で社会が動いているかを明確に、誰にでも分かるように掲げておくということである²¹⁾」。

もっともこの超越的理念の欠如うんぬんというテーマは実に多くの日本論

において触れられてはいる。しかしウ氏のいうように確かにこの問題にまともに向き合う日本論にはついぞお目にかからない。「ほとんどの著者が、日本人は置かれた状況に合わせて絶えず自分の考えや信念の調整を行うとは必ず書くが、このことの重要性については全く気づかないかのように、さっさと次のトピックに移ってしまう²²⁾」。

5 結 語

ウォルフレン氏の著書・発言に対する批判は突き詰めれば〈文化相対主義〉の問題である。確かにウ氏の日本観察には事実誤認の部分もあるだろうが、それは日本人著者でも犯しうる程度のものであって『菊と刀』などに比較すれば、まことに正確に事実にもとづいて日本を紹介しているといえよう。ウ氏に対する批判は明らかに氏のよって立つスタンスの問題である。つまり分析視角の問題である。ウォルフレン氏が臆せずに表明するところの、その強烈な西洋普遍主義そのものに対する批判である。「確かに西洋合理主義から日本を分析すればそうだろうが、あなたはいったい西洋合理主義以外のアプローチを認めたくないのか」と。

清水氏が指摘するように、日本のポジティブサイドを、つまり日本では調和やコンセンサスがどのように形成されたのか、そして産業面での日本の成功を描いていたならば、おそらくは日本の評者たちからもより好意的にこの書は受け入れられたであろう。もちろんその場合、ウ氏の悪魔の代理人としての迫力は半減したであろうが。

氏が日本に切り込むにあたって、権力行使の問題一点に絞ったのは新鮮であった。確かに今考えれば今までの日本論がなぜそうしたアプローチに欠けていたのか不思議である。「権力行使のあり方こそ、日常の社会生活面で我々に影響を与える、他の全ての事柄を決定づける²³⁾」のだから。権力行使の問題に光を当てたがこそ、ウ氏の視点は文化相対主義と真っ向から衝突すること

になる。ウ氏自身彼に対する批判が、西洋中心主義者・反文化相対主義者であろうことは彼自身十分に予想していたのであろう。ウ氏自身が述べる。

文化相対主義は、必ずしも相互に両立しない、一連の観念のことを指して言う。最初にこれを広めたのはアメリカの人類学者たちで、彼らは異文化(それも、たいていは！ 未開！ 文化だった)について書くとき、自分たちの偏見を極力排除しようとつとめたのである。単純に言うと、彼ら人類学者は、一民族はその民族自身の文化に含まれる基準以外で判断されるべきではないと唱道した。これは彼らが偏見なしにそれら文化についての最大限の情報を提供することを可能にした。一部の学者たちの解釈では、“文化的相対主義”は、ある特定国家でなされることはすべて、倫理的に中立である、と常に見なされるべきであるということの意味するようになった。

この後の方の展開は、明らかに政治理論の可能性を否定するものだった。政治理論(今日「政治学」と呼ばれ、事実の記録と解釈に主たる関心を抱く学問とは異なる)は、よい政治とはどんなものか、と尋ねる。そして最後になるが、それは、特定国の権力保持者にとって何が好都合かではなく、国籍のいか²⁴⁾んを問わず全人類にとって何が望ましいかを問題にする。

ウォルフレンはさらに続け、そうであるからして文化相対主義者は、「ソ連政治文化の基本的構成要素である、ソ連での人権抑圧を、裁くことはできない」し「徳川独裁政権の政治手法、あるいは日本を引きずり込み、およそ三百万の日本人と一千万人から二千万人の外国人の生命を犠牲にした権力保持者の政治手法に批判的ではあり得なかったはず」であるとする。つまり文化相対主義は価値判断停止の言い訳になりうるということである。だからこそ「文化相対主義の問題が一番口にされるのは、日本市場への外国参入者を厳しく束縛し、貿易バランスを日本有利に傾かせ続けている日本的慣行に対する外国からの批判に関連した場合であるのも、決して偶然ではない」という。

ウ氏に言わせれば「日本を管理する人々の弁護者たちは、意図的な政策の結果である政治経済の構造的特質の言い訳として、文化を使っている²⁵⁾」とい

うわけであり、文化相対主義を無自覚に唱える日本のリベラリストたちは、自覚するしないに係わらず、そうした言い訳の構造に荷担しているというわけである。ウ氏を批判するにあたって、氏を反文化相対主義者といったところで、上記のような氏の反論に応えた事にはならない。実際多くのウォルフレン批判に私自身が得心いかないのはその点である。ウ氏の言う政治理論につながる権力行使の分析に西洋普遍主義の影を見たとしても、それを反文化相対主義ということのかたづけられないのは明白である。そういった意味では文化相対主義—反文化相対主義論議は所詮知的デレクタンチズムに見えてきさえるのである。

そして、そこには日本には権力行使の問題と真っ向から向き合う知識人はいないのかというウ氏の声が聞こえる。付け加えれば、清水氏の言及するようにそうした感想はウ氏だけが抱いているものでもない。フランス新哲学派の旗手とよばれるベルナール・アンリ・レビ氏は旅行記「アジアの印象」の中で次のようにいう。「浅田彰は絶対知識人とはいえない。なぜなら現代日本の文化的世界には〈知識人〉という概念が無いからだ」「浅田彰氏だけでなく、他の人たちとも話し合ったが、西洋的な知識人という概念そのものが日本には存在しない。だから、浅田彰についても、彼は知識人では絶対ないというだけだ」「浅田彰は人物だ。だが、彼は、普遍的価値に奉仕するもの、あるいは善き、正義の、真実の人間たちの側で証人となるという知識人の定義と共存しているとは考えない人間であることは確かだ²⁶⁾」。

青木保氏は世界は文字どおり多元的な時代に入り、「普遍性」を強く主張する動き（つまりは反文化相対主義に連なる動き）と個別性を強く主張する動きが重層的に進行しており、「普遍性」と「個別性」のバランスがいま求められているというが、私にはその様に問題を総括することは出来ない。その前に清水氏のいうようにこの悪魔の大審問をまずはクリアーしなければならない。避けて通ることができないと考える。世界で進行しつつある西欧的・市民社会価値の復権の中で、その現実²⁶⁾に再び向き合い、これをクリアーしなけ

ればどうしようもないところに日本は立っていると考える。少なくとも「普遍性」と「個別性」のバランスなどという耳ざわりのよい言葉で問題を処理できないことだけは確かである。

注

- 1) 修正主義者——レビジョニスト 4 人組とは通常 Chalmers Johnson, Clyde Prestowitz, James Fallows それに Karel van Wolferen を指す。ウォルフレンは修正主義者が反日主義的であるとの一般に流布されているイメージは全く事実とかけ離れていると主張する。レビジョニストは、日本文化論に代表される文化的・心理的アプローチを廃し、政治・社会構造そのものを問題にするとウォルフレンは論ずる。I H J (国際文化会館) Bulletin Vol.10, No. 2, Spring 1990.
- 2) 訳文は (K. G. v. ウォルフレン「日本問題」「諸君」1987年4月号) なおその後ウォルフレンは、「フォーリン・アフェアーズ」誌に「The Japan Problem Revisted」を発表。訳文は「再び「ジャパン・プロブレム」を論ずる」(「中央公論」1990年11月号)。
- 3) カレル・ヴァン・ウォルフレン『日本/権力構造の謎』(上巻, 早川書房, 1990年) P.33.
- 4) 同上, P.101.
- 5) 同上, P.104.
- 6) 同上, (下巻) P.24.
- 7) 同上, P.226.
- 8) 「中央公論」1989年1月号。
- 9) 同上。
- 10) 村上泰亮「移行期における知識人の役割」(「中央公論」1989年3月号, P.192.
- 11) 『日本/権力構造の謎』下巻, P.31.
- 12) 青木 保『日本文化論の変容』中央公論社, 1990年, P.153.
- 13) 前出, 村上氏論文, P.192.

- 14) 月刊「ASAHI」1990年3月号, p.129.
- 15) 同上。
- 16) 月刊「ASAHI」1990年4月号, p.154.
- 17) 石積 勝「日米文化摩擦のキーワード」(「言葉のスペクトル」) 東洋女子短期大学, 1988年7月。
- 18) 清水邦男「ウォルフレンに感謝しよう」(「中央公論」1990年4月号, p.247.
- 19) 同上, p.251.
- 20) 同上, p.252.
- 21) 同上, p.254.
- 22) 『日本/権力構造の謎』上巻, p.45.
- 23) K. G. v. ウォルフレン「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追随するのか」(「中央公論」1989年1月号, p.69.
- 24) 同上, p.93-94.
- 25) 同上, p.95.
- 26) 同上。